

「関西学院の呼称について」 『関西学院史紀要』第十六号）への補遺

池田 信

補遺Ⅰ 校歌で聴く「クワンセイ」は漢語中古音に符合する

関西学院校歌「空の翼」における「関西、関西、関西、関西学院」のはじめの二つの「関西」の音調は、漢語中古音による「関西」の音調とたいへんよく似ている。

その類似点の第一は、音の高さと声調である。後掲の楽譜をみれば明らかのように、校歌ではクワン・セイをとおしてA音（ $\underline{\text{se}}$ ）である。したがって比較的高音であり、かつ平らに推移する。他方中古音の kuan と sei はともに上平、すなわち現代標準漢語という第一声——高くて平らな調子——である。

この kuänsei という中古音の記号表記は、『学研新漢和大字典』に拠る。k は息の（ほとんど）出ない、すなわち無気音の k として使用されている。

ちなみに同じクワンであっても漢語原音ではこの他に息の出る、すなわち有気音のものがある。ピンイン（現代標準漢語の発音記号）では guan（g は無気音）に対する kuan（ ㄎㄨㄢˊ ）では k は有気音）で

示される。前掲字典では有気音の *k* は *k* で示される。すなわち無気音 *kuan*・*guan* と有気音 *k^huan*・*k^huan* との区別となる。例示すると、寛・款などは有気音の、冠・慣などは無気音のクワンである。関西学院の「関」は後者、すなわち無気音のクワンであり、有気音のクワンとは区別される。

第二は、音節・モーラ(拍)数の一致である。中古音では *kuan* も *sei* もいずれも一音節・一モーラ、計二音節・二モーラである。日本語では通常はクワンは一音節・二モーラ、セイは二音節・二モーラ、計三音節・四モーラであるが、校歌のこの部分についていえば各一音節・一モーラ、計二音節・二モーラとなっており、中古音と同じである。

第三は、*kuan* という分節素音の長さである。*kuan* の *a* のうえに付された補助記号 *˘* に注目していただきたい。これは一般には短音記号 (Breve) として、そして国際音声記号 (IPA) では「特に短い」音 (超短という訳語もあり) を表す超分節素記号として示される。分節素とはこのばあいには最小の表意単位を示すものである。またそれは他の諸分節素と節合して句や文を構成する。ところで短音記号を母音ないしは主母音に貼りつけられた分節素はとくに短音のものとされる。したがって *kuan* は *sei* に比して短音の分節素であり、そのさい *kuan* はとくに短く約めて発音されることになる。

他方校歌の当該部分(後掲楽譜参照)を見ると、クワンは八分休止符を継いでの八分音符、セイは四分音符であり、まさしく *kuan* と *sei* との関係に符合する。ところで *kuan* が短音化されれば、これを有気音で発音することは不自然となり巧まずして無気音になっていくことに気づく。

「関西、関西、関西、関西学院」を通してみると、正統で美しい音調であるクワンセイを二度繰り返して強く印象づけ、つづくクワンセイで音調をゆたかに膨らませ、さらに「関西学院」全

体をくつきりと浮かび上がらせて締めくくる。kuanseiをみごとに活かしきっている。

以上の類似点から見て、「関西学院の呼称について」で触れたように、「関西」の漢語中古音での音調がW・Rランバス↓吉岡美国↓山田耕笹という経路で校歌に伝わったと想定することは、あながち不自然な推理とはいえないであろう。

校歌「空の翼」（発表一九三三年九月）のおかげで「くわんせい」の伝統的で美しい音調は、楽譜に対象化されて後々にまで正確に表示され、継承されることが可能となった。そしてとりわけグリーククラブによる校歌合唱が正しい音調を担保する核となった。そして関西学院に関わったものがその構成員としての自己同一性を示すあらゆる機会において「空の翼」を歌い続けることとなる。

このようにして関西学院の伝統的呼称は、長期にわたってなんらの質的変化も蒙ることなく守られてきたのである。

補遺Ⅱ 山田耕笹とクワンセイ

山田耕笹は関西学院に関する歌を「空の翼」を嚆矢として全部で五曲作曲している。このうち「関西学院」「Kwansei」の言葉が出てくるのは四曲である（関西学院キリスト教主義教育研究室編『関西学院の歌―関西学院校歌・応援歌・学生歌資料―第1集』参照）。

生命力のさらなる躍動を希求する北原白秋の詞を受けて、山田は、それをマーチのテンポ（Tempo di marcia）で仕上げることにした。そして「関西学院」という言葉を曲のなかにどのように組み入れるかを考えたとき、最適の音調として浮かんだのは学生時代からいくどとなく学

んできた「高くて平らな調子の kuânsei」だったに違いない。あるいはこの kuânsei を活かしかつてマーチのテンポを選んだのかもしれない。

しかし、彼の後の作品では「高くて平らな調子の kuânsei」はそのままでは活かされていない。作曲は詞の精神・内容に対応した曲想にしたがってなされていく。「緑濃き甲山」（一九三九年）では「麗朗に」・“A Song for Kwansai”（一九四九年）では「ゆつくりと厳かに」（Lento maestosamente）・「打ち振れ旗を」（一九五九年）では「快速強烈」という風に。クワンセイの音調もそれに応じて多様に変化している。

「空の翼」が吉岡美国の薫陶を受けた山田耕筰によって作曲されたこと、関西学院を歌ったもののうちで山田の最初の曲であったこと、行進曲のテンポで構成されたこと、それが戦時の一時期を除き今日に至るまで第一校歌の地位を占め式典、スポーツ試合などさまざまな集会において歌い続けられたことは、「高くて平らな調子の kuânsei」の音調を正しく継承していくうえでありへん幸運なことであったといえよう。

戦時の一時期に「空の翼」を歌うことが控えられたことについては、前掲『関西学院の歌』所載の半田一吉の解説、とりわけそのうちの「緑濃き甲山」に関する項を参照。一九四二年度版『報国団手帳』（関西学院報国団、同年六月発行）では「空の翼」は「校歌」として歌集の冒頭に、「緑濃き甲山」は（カレツジソング）という肩書を付した「校歌」として二番手に掲げられていたが、一九四三年度版（同年六月）では前者は取り払われ、後者が「校歌」としてはじめに掲載されている。

補遺Ⅲ クワン（クワン）とカン

関穎珊という中国系アメリカ人をご存じでしょうか。女性フィギュアスケート選手としてオリンピック、世界フィギュアスケート選手権、全米フィギュアスケート選手権などで活躍した Michelle Wing Kwan ≡ ミシェル・ウィング・クワンのことである。彼女の活躍は今から十年ほど前の時期のことであり、その優雅なスケートティングはいまなお多くの人びとの記憶に新たであろう。

ところで日本のジャーナリズムはその姓の「関」をクワンと表示した。現在の字音かな表示にもとづく正書法では関はカンであるが、さすがにそうすることを避けている。ミシェル・クワンとミシェル・カンとではその響きと印象があまりにも違うことを意識せざるをえなかったからと推察される。

「関」クワン（クワン）は口をすぼめ、息をほとんど出さずに短くクワンといい（円唇・無気音・短音）、カンは口を大きく開き息を出してカンという（開口・有気音）。例えていえば、前者は梵鐘の後者は半鐘の響きである。ランバスと吉岡があくまでもクワンにこだわったのは kwan と kan との音調の違いを明確に意識していたからである。またクワン ≡ kwan という発音の正統性だけでなく、その音調の優美さを思ったからであろう。

ランバスと協議して関西学院の命名にあたった吉岡美国は、クワンという発音にいだいた強い信念を吐露している。すでに引用済みではあるが、その言葉をここでふたたび引いておきたい。

「終りに關西學院は、**カン**サイでなく、**クワン**セイガクインと讀んで戴きたいのであります。これは言ひ傳へではありません。私はこれを云ふ資格があります。」

翼の空の歌

作詞 北原白秋

作曲 山田耕筈

Tempo di marcia [M.M. ♩ = 120]

か ぜ に お も う そ ら の つ ば さ か - が や く 自 -

由 - Mas - te - ry for Ser - vice セ -

い め い こ - こ に み - ち あ り - わ が お か 関

西 関 西 関 - セ い 関 - セ い が く

いん ボ プ ラ は は ば た く い ざ ひ び け -

わ - れ - ら か ぜ ひ か り ち か ら わ

か き は ち か ら ぞ い ざ い ざ い -

ざ う え が は ら ふ る - え い

ざ い ざ い ざ い - ざ う え が は ら ふ - る - え

「是非命名當時、呼ぶ事にしてゐた定めを通り、クワンセイ・ガクインと呼んで貰ひたい。否な、斯く呼ばねばいけないのである。」（ゴシックでの強調は池田による）